

授業アンケート結果 報告書

令和元年度(2019 年度)まとめ

教育開発・研究推進中核センター教育開発部門

1. はじめに

本学では平成 17 年度より、各教員の授業方法・内容の充実を目指し、実習を含むすべての講義・演習・実習科目について、受講学生に対しアンケート調査を前期・後期に 1 回ずつ実施してきた。平成 22 年度に設問の大幅な見直しを行い、23 年度から集計結果を公開してきた。平成 26 年度に設問を 2 項目追加し、現行の授業アンケートは 15 項目の設問および自由記述から成っている。

授業アンケートの設問は、授業に対する学生自身と教員の取り組み姿勢、授業内容の理解度・達成度および授業の意義という観点から設定されている。その集計結果は、本学の教育理念「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」に相応しい教育が行われているか否かを知る貴重な手掛かりとなる。以下、令和元年度(2019 年度)の授業アンケートについて、実施方法と全体および学科単位での集計結果を示す。

2. 授業アンケート実施方法

アンケートの内容と配付・回収：

アンケートの設問は「学生自身の授業の取り組み」に関する 5 問(結果の図中 Q1～Q5)、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」に関する 7 問(Q6～Q12)、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」に関する 2 問(Q13～Q14)、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」に関する 1 問(Q15)である。回答は「あてはまる」から「あてはまらない」までの 4 段階または時間や回数などを 4 段階に区切った選択肢から 1 つ選ぶ形式とした。また自由記述の欄があり、授業への感想や要望等があれば記入することになっている。

すべての科目について、前期・後期に 1 回ずつ、原則として授業の最終回に時間を設け、今年度よりユニバーサルパスポート(本学 WEB 学習支援システム)において実施している。

アンケート対象学生数と科目数：

令和元年度(2019 年度)の授業アンケートの対象となった教員数、科目数、学生数を下記※表 1 にまとめた。

※ 表 1

アンケート実施		科目数	専任教員数	非常勤教員数	教員数	アンケート回収数	受講生数
令和元年度	前期	604	112	45	157	9752	14910
	後期	625	118	36	154	6298	14844

アンケート集計・解析方法とフィードバック：

各学科の学年ごとに、設問に対する 4 段階回答を集計し、学年及び学科単位で回答の割合を図示した。各授業科目については、科目間での比較のために差が顕著に表れるよう 4 段階回答を 8、3、2、0 点として点数化し、また設問項目間での比較のために評価レーダーチャートを作成した。

アンケートの集計・解析結果については、各教員へ担当分の結果を配布するとともに、学科全員分お

および学科単位での結果を学部長へ配付し、その後学科長が各学科において、アンケート結果をふまえ授業改善につなげられるようにフィードバックを実施している。

なお平成 28 年度より、授業に対する学生の自由記述内容について pdf ファイルによるデータ化を行ない、30 年度は web 上での自由記述を試験的に実施した。

本年度より全項目を web にて実施した。Web にて実施することにより、学生からの自由記述のコメントを、集計後速やかに担当教員に開示することが可能となった。また自由記述をデータ化することが容易となった。

但し、後期授業アンケート回収率が下がっており、実施にあたり担当教員のさらなる協力と、学生への授業アンケートの重要性の周知が今後の課題となると思われる。

3. 授業アンケート結果

授業アンケート結果については、アンケート内容である「学生自身の授業の取り組み」、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」について、各学科での回答割合を図で示した。全学的な総括は、過去の結果との比較および学科間での相違に着目して行なった。

全学的アンケート結果（図Ⅱ）

各学科のアンケート結果を基に大学全体での傾向をまとめた。「教員の授業に対する取り組み」は概ね高評価であった。「学生の理解度・達成感」では、前年度の高い値を維持していた。「学生の授業への取り組み」では、予習・復習時間や準備学習が不十分であった。総合評価としては、本学では全学的に「意義ある授業」が行われているが、学生の自己学習を推進する必要があると考えられた。

「学生自身の授業の取り組み（Q1～5）」

前期・後期ともに、大部分の学科において授業を 4 回以上欠席した学生は 5%以下であった（Q1）。予習（Q2）、復習（Q3）、準備学習（Q4）については、学科により差はあるが、前年度と同様に 20%～50 の学生は全く授業外に学習していないことが示された。一方、授業に関しては大部分の学科において 90%程度の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と答え、居眠りや私語など無く意欲的に取り組んでいると考えられた（Q5）2019 年度より、授業外学習の具体的な方法手段をシラバスに明記することとしている。シラバスが学習習慣改善の方策としても機能するように、学生への周知を徹底する必要があると思われる。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み（Q6～12）」

シラバスに沿った授業と目標や習得すべき事項の説明（Q6, 7）、授業開始時間や授業雰囲気確保に対する教員の努力や学生の授業への参加を促す努力（Q8, 9, 10）、およびわかりやすい講義資料の作成や説明が行われたか（Q11, 12）について、前期・後期ともに全学科において 90%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と答え、大部分の学生は教員の取り組みを認めていると考えられた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度（Q13・14）」「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か（Q15）」

学生の理解度（Q13）、学習意欲の高まり（14）および授業の意義（Q15）について、前期・後期ともに全体として約 90%の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と答えていた。これらは授業に対する教員の熱心な取り組みの成果であると思われる。

臨床福祉学科アンケート結果(図Ⅲ)

「学生自身の授業の取り組み」

本学科学生の授業への取り組みについて、【欠席状況】では、4～5 回以上欠席した学生が 10%弱おり他学科に比べ多い。特に 4 年生後期は約 30%である。【予習復習時間】では、70～80%の学生が「30 分未満・ほとんどしなかった」であり、全学科を通して一番多い結果となった。特に、2 年次の前期・後期に関しては、80%と割合が高くなっている。前回の結果でも同様の結果となっている。再度、全教員に 1 年生のうちから予習復習の学習習慣を身に着けるような指導と 2 年次学生に対し再度指導を促していきたい。【授業中の取り組み】を見ると、「Q5. 授業中居眠り・私語・遅刻早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか」の問いに対して、「あてはまる・ややあてはまる」が全学科を通して低い傾向にある。

4 年次後期は、欠席状況、授業中の取り組みに関して 4～5 回以上欠席、学習に意欲的に取り組めていない学生のパーセントが全学年、前・後期を通して多い傾向にある。4 年生後期は卒業要件の単位が不足している学生が、卒業するため予備的に多めに履修していたり、意欲的に取り組んでいるわけではないので、このような結果になっているのではないかと考えられる。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

学生から見た教員の授業の取り組みに関する設問では、「あてはまる・ややあてはまる」が、すべての学年および学期において 95%以上と高く、学生からは概ね良好な評価であった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度・達成度に関する設問では、「あてはまる・ややあてはまる」が 90%弱と概ね良好であった。2 年次が他学年と比べ低い傾向にはあるが、学年の進級につれ良好になってきている。2 年次前期では大学にも慣れ、やや中だるみが生じているのではないかと考えられる。これは、学生自身の授業の取り組みがほかの学年に比べ 2 年次前期が低いことと関連している。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について 95%以上の学生が「あてはまる・ややあてはまる」と回答している。しかし、「あまり当てはまらない」と回答した学生数は 2 年次前期が多く、昨年度と同じような結果になった。2 年間同じような 2 年次前期の特徴が出ているので、この結果を全学科教員と共有し、指導に当たっていく必要性を感じている。

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】は、3 回以内の欠席でみると、1～3 年では前期後期とも 90%以上である。4 年生では就職活動や教育実習が実施されるが、前期後期とも 80%以上とおおむね良好な出席状況である。昨年度の報告で気にかかる点として、1 年前期の欠席 0 回の学生の割合が、2016 年度約 74%、2017 年度約 65%、2018 年度約 52%と徐々に減少傾向にあることを挙げたが、2019 年度約 66%とやや改善された。

【予習復習】は、前期では 1～3 年と学年が上がるにつれて実施率が上昇する傾向があるが、後期は 1 年生が上昇し、2、3 年には低下傾向が認められる。4 年については、前期の実施率は 60%程度であるが、後期は 80%以上となっている。1 年前期の予習を「ほとんどしなかった」割合は、2016 年度約 60%、2017 年度約 57%、2018 年度約 52%、2019 年度約 45%と、徐々に減少している。

【学習への意欲的な取り組み】では 80%以上の学生が肯定的に回答している。

昨年の報告で気になった点として挙げた 3 年後期の出席状況について、2019 年度は改善されて 1～3 年生の欠席 3 回以内の者は 90%を超えていた。予習復習は、「ほとんどしなかった」学生の割合が 2、3 年後期に増加傾向が認められた。各種認定・国家試験や採用・就職試験に対する地力を養成する重要な時期であり、この中弛み傾向を改善し、所期の目的達成のために意識づけを高める対策をより強化・充実させていく必要がある。中期目標・中期計画に沿って、資格試験に対する意識づけを高める対策・指導を行い、ほとんどの資格試験で全国平均を上回る合格率となっているが、学年進行とともに受験をあきらめる学生もみられ、意欲的に資格取得を目指す者とそうでない者との二極化の傾向が続いている。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6～12 のすべての質問において、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると全学年においてほぼ 90%を超える肯定的な回答を得ており、学生からは概ね良好な評価を得ている。昨年の調査において積極的な評価が低い点が気になった 2 年については、前期は昨年同様に他の学年と比較して積極的な評価が低い傾向にあったが、後期にはすべての質問において 90%を超える肯定的な回答を得た。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

学生の理解度・学習意欲の高まりについては、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると、2 年前期を除いて 90%を超える肯定的な回答を得ている。昨年の調査において積極的な評価が低い点が気になった 2 年については、前期は昨年同様に他の学年と比較して積極的な評価が低い傾向にあったが、後期には 90%を超える肯定的な回答を得た。引き続き、大学へ入学して新たな環境で学習に取り組み始める新入生に対して、より理解しやすく、学習意欲を高めるための授業の工夫・改善を継続していく。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について、2 年前期を除いて、90%以上が「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をしており、1、2 年よりも 3、4 年で肯定的な評価の割合が高くなる傾向が認められた。「あてはまる」だけに着目すると約 70～93%であり、昨年と同様であった。1 年の評価に着目すると、前期約 75%・後期 74%であり、この評価を 80%以上に向上させなければならない。本学科への進学に対する満足度を上げるために、新入生の段階から、今の学びが将来につながっていることを学生に授業を通して理解させながら、学習意欲の向上を図る取り組みの見直しが必要である。

作業療法学科アンケート結果（図Ⅴ）

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、欠席 3 回までを含めると 90%以上と概ね良好である。1 年次（21 期生）が良好だが、この傾向は 2020 年度も続いている。

予習復習について、前年度の調査では予習は全学年をとおして「ほとんどしなかった」との回答が 50%を超えていたが、本年度では若干改善している。また、学年が上がるにつれて若干良好な傾向を示しているが各学年ともばらつきが多い。ただし、4 年次（18 期生）の前期のほとんどが学外臨床実習であるのに復習が少ないのは理解できない。理由のひとつに学外臨床実習がこのアンケートで問われる「授業」の範疇に入らず、学生がケースノート作成などを復習と捉えていない可能性がある。また、18 期生が低学年から学習意欲の低いクラスであったことも理由の一つと考えられる。

私語や居眠および遅刻早退については 90%が「あてはまる（していない）」と回答しているが、4 年次（18 期生）の後期は「あまりあてはまらない・あてはまらない」が 80%と多い。4 年次はそのほとんどが学外臨床実習であるのに、この結果は実情を反映していない可能性がある。学生がアンケート用語の「授業」をどのように受け取ったのか疑問が残る。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスについて、概ね 90%以上がシラバスどおりの授業進行であると回答している。教員の授業内容説明についても同様である。私語等に対する注意も、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年ではほぼ 100%に近い。教員の授業に対する取り組みも（開始時間も含む）、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年で 90%を超えている。ただし、全学年を通して居眠りはまま見られるが、そもそも私語は少ない。授業参加への促しについても、教員の説明のわかりやすさ及び講義資料についても同様である。なお、ほぼすべての項目で 1 年次（21 期生）の評価が高い。授業の開始時間に関しては、開始時間を守っていない教員は皆無であり各教員自身の印象とは異なる。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度および意欲」

授業内容の理解、学習意欲について、前期は全ての学年で肯定的意見が 80～90%程度だが、後期の 4 年次を除きほぼ 100%である。逆に 4 年次（18 期生）の後期で 90%台に落ちている。4 年次の授業が特別講義主体であり、講師の入れ替わりが多いことに原因があるのかもしれない。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

傾向は前項と同じである。1～3 年時の 90%程度以上が肯定的だったのに対して、4 年次（18 期生）だけは 80%程度に落ちている。18 期生が学習意欲の低いクラスであったことが原因かもしれないが、程度の差はあれ、同じことが 3 年次（20 期生）にも当てはまる。3 年次になるとほぼ全てが専門科目となり、難易度が高くなることが反映されているのかもしれない。

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、いずれの学年も欠席 3 回以内の学生が 90～100%と良好な結果を示していた。1 年生後期、4 年生前期で欠席回数がやや多い点については注意喚起が必要である。

予習時間および復習時間は、学年が上がるにつれ、ほとんどしなかったと答えた学生の割合が減る傾向があり、30 分以上学習する学生の割合は 5～85%と学年により差がみられた。とくに、3 年生後期で 70～85%と高い割合を示した点が評価できる。一方、1 年生前期では 5～20%と低い結果を示しており、早い時期からの学習習慣の形成が課題である。シラバスに記載されている準備学習を行っている学生の割合は 40～95%であり、4 年生前期で 30 分以上が 15%、1 時間以上が 75%と高い割合を示していた。

学習に意欲的に取り組んだかに対して、あてはまる、または、ややあてはまると回答した学生の割合は 1・2・4 年生では 80～100%と良好な結果を示していた。3 年生は、前期が 90%以上だったのに対し後期には 50%と低下していた。3 年生後期に実施する学外評価臨床実習の影響も考えられ、関連性について検討が必要である。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスにそった授業、授業の開始時間の厳守、授業への参加の促し、わかりやすい説明や指導、講義資料の適切性、授業の雰囲気については、いずれの学年も 90～100%が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており、教員の授業に対する取り組みが高く評価されていた。

授業目標・修得すべき事項の説明については、1・2・3 年生では 95～100%が、あてはまる、または、ややあてはまると回答していたが、4 年生は、前期が 90%だったのに対し、後期には 75%と低下していた。国家試験対策が中心となる 4 年次後期には、講義資料や指導方法を適宜、見直すとともに、授業目標・修得すべき事項を繰り返し説明する必要がある。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業の目標や修得すべき事項を理解できたか、および、授業で学習意欲が高まったかに対しては、いずれの学年も 95～100%が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており、授業に対する学生自身の理解度・達成度は高いといえる。

あてはまるだけを見ると、1 年生が 70～80%と、昨年度に比し低い傾向があった。大学の授業形態への導入時期である 1 年次に、学生の理解度に配慮が必要であることが伺える。

「学生にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業は意義のあるものであったかに対しては、いずれの学年も 95%以上が、あてはまる、または、ややあてはまると回答しており高く評価できる。あてはまるだけを見ると、今年度は全学年で 80～100%と、昨年度に比し改善がみられている。

学生の満足度を高めるためにも、学科教員間で、各学年の授業の内容や方法について引き続き議論を重ねていくことが重要であると考えられる。

視能療学科アンケート結果(図Ⅶ)

「学生自身の授業の取り組み」

【欠席状況】本学科は募集停止のため、1年生はいない。全体として授業への出席率は高い。後期に関しては、毎年、授業欠席に対する単位への影響等を指導していることから、欠席者数は少なくなっている。また、後期では高学年ほど出席率が高い傾向が見られた。おそらく、国家試験や就職等、社会人としての自覚が芽生えた結果であることが考えられた。

【学習への意欲的な取り組み】2年生よりも3年生が予習・復習時間が多く、逆に4年生は少なくなっていた。

Q2～Q3 の自主学習時間（予習復習）については 前期と後期を比較するとわずかではあるが増加している。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

Q6～Q12 のすべての質問では、2～4年次において「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると90%以上の回答を得ており、学生からは概ね良好な評価を得ていた。Q9～Q12については、本学科でも高い傾向にあり学生の満足度は高い。2年次の基礎科目でも高い満足が観られた。高等学校までとの授業スタイルの違い、たとえば、パソコンおよびプロジェクターを用いて、板書が少ない、あるいは、理系でもこれまで選択していなかった生物学的科目等に対する戸惑いがあるのではないかと心配したが、大きな問題はなかった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

Q13～Q14 のすべての質問における、学生の理解度・学習意欲の高まりについても、2～4年次においては「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせるとほぼ90%の肯定的な回答を得ている。しかし、2年次後期は80%程度であった。その理由として、新入生のモチベーションが一時的に低下したことが考えられた。大学へ入学して新たな環境で学習に取り組み始める新入生のモチベーションを持続させることへの授業の工夫・改善が不足していた可能性がある。また、授業が判らない場合や、不服、不満等がある場合に学生が気軽に相談や不服申し立てできるような窓口を当科として設ける等の対策を構築していることから、有効に活用してもらいたい。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について、「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答をした生徒は、2年の後期で90%以上となっており、3年および4年後期では、ほぼ100%であった。一方、2年次は前期85%程度であったが後期には90%以上となっており、学科教育が有効に機能していると総括される。

当科においては、2年次の基礎科目においても国家試験に準じたカリキュラムを行っている授業もあるが、そうでない授業もある。しかし、社会に有為な人材の育成という本学の建学の理念を考えると、多方面での教養や知識が、本学卒業後にも、必ず役立つといった、広い視野をもって学習すべきと考える。いずれにせよ、視能訓練士を養成する本学科では、興味の持てる面白い授業を行うことで、生涯を通じて、学習とは楽しいことであるということを悟って身につけていただければ良いと考える。そのためには、楽しく学習でき、いつでも質問、不満などを気軽に相談できる開かれた自由な雰囲気が必要であると考えます。

臨床工学科アンケート結果（図Ⅷ）

「学生自身の授業の取り組み」

授業の欠席回数は、全学年で見ると前期に比して後期が若干増加しているものの大きな差はない。予習の時間に関しては、各学年ともに前期より後期が増加している。1年次においては前期に予習をする学生が非常に少ないが、授業の内容が本格的なもの（専門的）になる後期においては予習していることがわかる。復習についても予習と同様な傾向を示しており、予習・復習をしないと授業についていけないことを理解している。学習時間は前期よりも後期の方が多くなっている。4年次生は予習復習の時間が最も長く、特に後期は国家試験対策に集中していることが分かる。シラバス内容の準備学習も予習復習と同様の傾向であった。「授業中居眠り・私語・遅刻早退なしの学習の意欲的な取り組み」については、後期に増加傾向となった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「シラバスにそっての授業」、「授業目標や修得すべき事項の説明」、「授業の雰囲気」、「学生への授業参加の促し」、「わかりやすい説明や指導」、「講義資料の適切さ」、「修得すべき事項」に関して、全学年ともに95%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、教員の授業に対する評価は高いと推測される。教員全体のミーティングでは前期・後期ともに同様の対応を行ってきた。今後、アクティブラーニング等の取組を増加させ、引き続き、学生個々の能力を伸ばす指導を継続させることが重要である。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標は習得すべき事項の理解」、「授業での学習意欲の高まり」については、1～3学年についてはともに95%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、今までの学習が十分になされていることが伺える。しかし、4年次後期において学習意欲が低下している学生が僅かだがいる。国家試験対策で少し疲弊している可能性がある。この時期の4年次学生は精神的にも不安定であり十分なフォローをする必要がある。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

全学年ともに95%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」を回答しており、授業は意義あるものであったと推測される。シラバスに記載されている授業目標、修得すべき事項を十分理解した上で授業に望んでいたと言える。今後、授業の中に積極的にアクティブラーニングあるいはWeb学習などを取り入れ、一方向型教育の改善が必要であると感じられた。

薬学科アンケート結果（図IX）

「学生自身の授業の取り組み」

欠席については、1-5 学年は 8 割前後の学生がほとんど欠席はなく、欠席 1-3 回の学生を含めるとほとんどの学生の出席状況は良好であった。しかし、6 年生では他学年に比べて欠席率が高く、1-3 回、4-5 回、及び 6 回以上の欠席が前期 50%から後期 70%近くに増加していた。この傾向は近年毎年繰り返されている傾向があると思われるので、近年の国試合格率の減少と呼応した何らかの対策が必要である。

予習・復習については、学年により若干の差があるが、ほとんどしなかった学生は概ね 10-40%程度であった。また、1 時間以上予習・復習をしている学生は全学年を通してほぼ 30%以下であり、特に 4 年生で顕著に低く、10%以下であった。全学年を通して、例年に比べて予習も復習もしない学生の割合が増えている傾向にあると感じられた。予習時間に関しては、特に、4、6 年生の前後期通して 1 時間以上予習した学生の割合が 20%以下と共用試験や卒業・国試を前にして予習量が少ない学生の割合が多かった。復習時間については、6 年生の復習時間は若干予習時間より伸びたが、4 年生の 1 時間以上の復習時間の学生割合は、全学年の中で最も少なく 10%程度であった。4、6 年生への授業に対する取り組みを変えるように強く指導する必要があると感じた。

シラバス記載の準備学習では、5 年生前期ではほとんどしなかった学生は 50%以上であり最も多く、他学年では 20-30%程度の学生がほとんど行っていないことが明らかとなった。学習に意欲的に取り組みましたかという設問に対しては、5 年生前期（70%程度）以外は、いずれの学年においても、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせるとほぼ 90%程度であった。

「教員の授業に対する取り組み」

1, 2, 3, 4 年生前後期通して、教員の授業に対する取り組みに関するすべての設問では、例年と同様に、「あてはまる」、「ややあてはまる」が 90%程度を超えていました。しかし、5 年生前期では、すべての設問で「あてはまる」、「ややあてはまる」が 90%以下で「あてはまらない」の解答が顕著であった。しかし、5 年生後期では、すべての項目に対して 90%以上と改善されていた。6 年生前後期通じて、授業の目標や修得すべき事項を毎回説明したか、授業への参加を促したか、分かりやすい説明・指導をしたか、講義資料が適切か、の項目については、「あてはまる」、「ややあてはまる」が 90%以下が多く、教員の高学年の授業に対する取り組みを改善する必要があると感じられた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

1, 2, 3, 4 年生前後期通して、授業に対する学生自身の理解度・達成度は 90%程度であった。しかし、5、6 年生では前後期通して、授業の目標や修得すべき事項を理解したか、学習意欲が高まったかの項目について、「あまりあてはまらない」、「ややあてはまる」の回答が増加していた。例年に比べて 5、6 年生は授業に対する学生自身の理解度・達成度を感じていないと思われた。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

1, 2, 3, 4 年生前後期通して、意義のある授業であったか否かについては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価が、ほぼ 90%超であった。しかし、5、6 年生では 80%未満になる場合が多く、講義に意義を感じていない学生が増加していた。

動物生命薬科学科アンケート結果（図X）

「学生自身の授業の取り組み」

欠席については、いずれの学年においても、欠席が3回以下であったが、前期において3年生の約50%、後期において2年生の約60%で1回以上の欠席が見られた。通常、4年生においては就職活動のために1回以上の欠席が他学年よりも多く見られるが、今回、2・3年生の欠席が4年生を上回ったことについては、その理由を解明するなど今後の改善すべき課題である。

予習・復習時間については、ほとんどの学年および学期において、「30分未満」、「ほとんどしなかった」を合わせると、概ね50～80%を占め、昨年度と同様に少なかった。シラバスに記載されている準備学習については、「ほとんどしなかった」、「30分未満」を合わせた結果は、約30%（3年生後期）～約80%（4年生後期）であり、学年および学期におけるバラツキが大きかった。しかし、「学習に意欲的に取り組みましたか」という設問に対しては、いずれの学年においても「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、概ね80%を超えており、学習への意欲的な取り組みは、良好であった。

「教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に関する取り組みに関する設問では、すべての設問について「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、約80%以上であり良好であった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標や修得すべき事項の理解」並びに「授業での学習意欲の高まり」の質問に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、ほとんどの学年および学期において、約90%以上であり良好であった。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

意義のある授業であったか否かについては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせた評価は、すべての学年および学期において約90%以上であり良好であった。

生命医科学科アンケート結果（図 XI）

「学生自身の授業の取り組み」

全学年において授業欠席回数 0～3 回は、前期・後期とも 95%以上であった。例年通り 4 年生に関しては卒業研究や国試対策授業の回数が非常に多い関係で欠席が多く見えるが、出席率ではそれほど悪くないと考えられる。予習を 1 時間以上行った学生は前期・後期を通して、3～4 年生は概ね 25%～50% であったが、1～2 年生は十数パーセント以下であった。予習を 30 分未満～ほとんどしなかった学生は前期・後期を通して、1～2 年生でおよそ 70～80%、3～4 年生でおよそ 25～60%であった。4 年生後期は国家試験が迫っているため、予習時間が多い学生が増えたが、ほとんどしていない学生も約 20%みられた。復習を 1 時間以上行った学生は 1 年生では約 20%、2 年生は約 25%、3 年生は約 40%、4 年生は約 70%であり、高学年ほど復習時間が多い学生が多かった。復習を 30 分未満～ほとんどしなかった学生は 1 年生前期でおよそ 40%もいたが、後期では 25%に減少した。2 年生～4 年生では平均すると 20%前後であった。予習復習の両方において 1、2 年生の学習時間が短く、今後指導する必要があると考えられる。シラバスに記載されている準備学習についても、上記予習時間と似たような傾向がみられ、1 年生で時間数が短かった。「学習に意欲的に取り組んだか」という設問に対しては、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 90%前後であった。3、4 年生の後期ではほぼ全員が意欲的に取り組んでおり、良い傾向であると考えられる。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「シラバスにそった講義かどうか」、「授業の開始時刻は守られていたか」、「授業中の静穏な雰囲気が保たれているか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 90%以上であった。ほとんどの学科教員の講義は高評価であった。「担当教員はわかりやすい説明や指導を行ったか」についての設問でも、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると前期・後期通して 90%以上であり、概ね学生の満足度は高いことが伺われた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「授業の目標や修得すべき事項を理解できたか」および「授業で学習意欲が高まったか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると 1 年生前期と 4 年生前期を除き、90%以上であった。1 年生前期と 4 年生前期は約 85%にとどまったが、後期で 90%以上になり、改善がみられている。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「授業は意義あるものだったか」についての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると、前期・後期通して概ね 90%以上であった。1～3 年生までは高学年になるにつれて高い評価であったが、4 年生では授業に不満のある学生が比較的多かった。4 年生では国試対策授業がほとんどであるので、今年度の国試対策授業へ向けた改善が必要とされる。

全体を通して、3 年後期の授業評価が高いが、回答数が少なく好意的な学生の回答が多数を占めた可能性もあると推測している。